
鏡界～きょうかい～

閏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡界くきょうかい

【Nコード】

N9282K

【作者名】

閏

【あらすじ】

ファンタジーだけどホラー要素が入ってます。

同性愛とまではいかないけど、少し行き過ぎた愛情表現は多々含まれると思います。あと、えげつない描写も入れるかもしれません。そつというのが苦手な方は閲覧を控えて下さい。

主人公は少女のような容姿をした、意思が強い、けれど天然が少し入ってる少年です。主人公最強者とまではいきませんが、ある程度は強い設定です。主人公は前世から続く過去の因縁を清算する為に

行動を起こします。特殊な力などという設定に魅力を感じる人は見てみると面白いかも？

薄暗い背景で、悲しいけど、何処か温かい…そんな物語が書けるように頑張ります。

「序章」(前書き)

この「鏡界」の導入部分です。

いきなり、主人公とは別視点から始まっていますが、次回からはちゃんと主人公視点です。

伏線も張りまくってますがきちんと回収する予定ですので、長いお付き合いをしていただければ嬉しく思います。

更新は最低週一ぐらいで…もしくはそれ以上を目指しています。

では、未熟者の書く文章ですがどうぞ。

く序章く

「優貴^{ゆき}? どうしたんだ?」

「……由兄^{よしにい}…今、何て言った…?」

どこか呆然とした表情で、弟である優貴が、俺に訊いてくる。その顔色は少し青褪めていて、調子が悪そうに見えるが……。

「え、ああ。だから、俺の働いてる学校が、廃校になるんだと。なんでも、古い校舎だからなあ…。安全面で不安だし、今建て直す費用も用意出来ないらしくてな。」

ほら最近、彼方^{あちこち}此方で地震が発生してるだろ? で、新しく出来た制度で全国の学校で耐震検査とかしないといけなくなったんだ。

それで、まあ当たり前だが引っ掛かってな…俺もお前もあそこの卒業生だから…無くなるのは寂しいけどな……。」

「…そつ、か。何か、いきなり聞かされたから吃驚^{びっくり}した。」

そう呟いたきり、優貴は少し俯いて何かを考え始めてしまった。
…珍しい、何時もは、ぼやぼやしてる優貴がこんなに真剣に考え事をしてるなんて。

「…優貴、お前なんか変だぞ。熱でもあるのか?」

「えっ?! そんな訳ないって! …… たださ、あの学校には色々お世話になったからさあ…。」

「…へえ、そうだったか?」

「うん……なあ、その学校…廃校になる前にさ、見学しちゃ駄目、か。」

「やっぱ、自分の通ってた学校だし、無くなる前にもう一回ぐらい見て置きたいじゃん?」

「あゝ、お前がそう言うなら俺から許可はとってやるけど。」

「ホントツ!!? じゃあ、お願いっ。」

親父に似た俺とは違って、優貴はお袋に似ている。つまり、母に似たその大きな漆黒の瞳がキラキラと期待に輝いているのだ。

小さな頃は、本当に女の子にしかみえない子供だった。…今でも髪が長くなってくると、少女に間違われてるみたいだが…。

その度に不機嫌になって、ブーブーと文句を垂れてるからな、分かり易い。

しかも、優貴の存在が判った頃、性別を教えて貰うのを断ったので、男の子だったらゆっき、女の子だったらゆき、という読み方にしようとして決まっていたのに…。

いざ生まれて来て顔を見た途端お袋が、男の子だって分かっているにも関わらず、ゆきという読み方に決めてしまったのだ。

なんでも「この子は絶対に、ゆき、よ。それ以外は駄目なの。」と

いって即決してしまったらしい、親父によると。

このことは、俺と親父の中だけの秘密で、勿論優貴には内緒だ。

まあそれは置いて、何が言いたいのかというと、要は、兄馬鹿という鼻屑目を除いても優貴は、世間が認めるほどには可愛い容姿をしているということだな。

それで瞳がキラッキラしてるわけだ。

…それはやっぱり、期待に応えなくなるものだろう？

「分かった分かった。ちゃんと許可をとってやるよ。…お前一人だけでいいのか？

悪いが一応今年の六年が卒業するまでは、学校で教えないといけな
いからな…。土日といっても学校ですることがあるんだ。

俺は案内できないからなあ…お前、誰かを誘ったほうがいいんじゃないか？」

「んー、そうしょっかな。じゃあ、啓^{けい}を誘ってみるよ。」

「ああ……お前のお友達の…。」

あいつか…。気に食わない奴だが、……仕方ないか。
あの時も、一緒だったしな……。

「ちょっと電話してくる！」

「ああ。」

はあ、少し元気にはなつたみたいだが、一体どうしたんだ？
何時もの優貴らしくなく、眉間に皺何か刻んで…。
何か、心配ごとでもあるのか？

数分後、妙に明るい表情を浮かべて優貴が戻ってきた。
お友達には、快く了承して貰ったらしい。

思えばこの時、違和感を感じたことはたくさんあった。
あの時、俺がもっと深く優貴に問い質^{ただ}していれば、今のこの状況は
起きなかったのだろうか。

ゝ序章ゝ（後書き）

どうだったでしょうか？

お気に召さなかった方はごめんなさい、頑張つて精進します。
この書き方、好きだなと思ってくれた方はまた読んでもらえたら嬉しいです。

読んで貰いありがとうございました。

〈第一話〉（前書き）

基本的に投稿するのは土日になると思います。

けど、気分によっては変わるかも？

最低一週間に一回は投稿するようにします。長い間になりますが…。

前回の話から見てくれた方、ありがとうございます。

初めましての方も、よろしく願いします。

では、本編の方へどうぞ。

今回は主人公の考え方が分かるかも？

〈第一話〉

由兄よしにいから離れて、携帯を取りに自分の部屋へと早足で向かう。
心臓が、すごくドクドク言ってる…。

怖い……でも、俺が何とかしないと、いけないんだ。俺しか、居ないんだし。

自分の部屋に入って、扉に凭れて深呼吸する。
啓に、電話しないといけないけど…緊張する…。

「はは、情けな…。」

拳を作り、握り締めて気合を入れる。

親友に電話するのに、これだけ緊張するのも珍しいよな。

そう考えると、気が少し楽になって…思い切って電話を掛けるボタンを押す。

…コールしてる間にこれ以上緊張しないように、ぼんやりと意識を飛ばしながら待っていたら、繋がった音がした。

「…あ、もしもし。啓けい？」

「うん。優貴ゆき、どうかした？…なんか、すごく緊張してる、声。」

「え、嘘。……はあ、やっぱ啓には解かる？」

「あはは、僕たち何年親友やってると思うてるの。それに…優貴の

隣に僕はいつも居たし。」

「……うん。ありがとう、少し落ち着いた。…で、用事なんだけどさ」

「何…？」

あつという間に緊張していることを知られたけど、まあ啓だし。ただ、……これから言うことに啓は反対するんだろうか、分からない。でも…

「…啓は、小学校の時のこと、覚えてるか？」

「っ、……当たり前じゃないか…。あんな強烈な事、早々に忘れる訳が無い。」

ああ、もしかして…また何かあったの？」

「ううん、今は何も無い…何も起こって無い。でも…これは感でしかないけど、きつと何かが起こる…そんな気がして、さ。それで、今日…今さっき由兄から聞いたんだけど。」

「うん。」

一呼吸置いてから話を続ける。

「…小学校、廃校になるんだって。だから…」

「！…そう、なんだ。…、優貴はまた其処へ行くつもりなんだね…」

「やっぱ、お前は反対するか？」

「…反対して、止められるのなら止めたい。けど、優貴は頑固だからね。

良いよ、僕も一緒に其処へ…もう一度行く。…もっとも僕には力が無いから、足手纏いにしかないけど。」

「そんなことない。…あの時だって、啓がいたから此処へ帰って来られた。

啓が居ると、すごく心強いんだ。…止めないでくれてありがとう、啓。」

俺には、小さな頃から普通の人には見えないモノが見えていた。

幸いにも俺には、それが異常な事なのだと教えてくれる人がいたから、毎日を何とか過ごす事ができたが。

ただ、俺のその力は強過ぎるらしい。

元々霊媒体質の俺は、小学生のある時まで、完全に力を抑え込む事が出来ないでいた。

そんな時、今話している啓と一緒に異界へと引き込まれてしまったんだ。

そう、俺たちが通っていた…そして今廃校になろうとしている、あの小学校で。

「…ごめん、啓。巻き込んで…」

「違うよ。巻き込まれてるんじゃない。僕が自分で望んだんだ。君が、その宿命を受け入れて、抗おうとしてくれるから、僕は優貴を助けたいと思うんだ。」

「何時も助けられてる。ただ、大切だから危険なところへ連れて行きたくないって思う。でも、やっぱ俺はまだ此处で生きていきたい。今度は……。」

「うん。解かってる。」

「ありがと。あと、愚痴言っでごめんな。じゃあ、日にちが決まったらまた連絡するから。」

「待つて。…優貴、今度はあんなの選んじゃいけないよ。解かったね?」

「…了解、啓。またな。」

「うん。じゃあまたね。」

携帯はもう、待ち受け画面に戻っている。

…今度は、か。

あの時の選択が間違っていたとは今でも思っただけ、これを言うとな怒られそうだな。

その状況を仮定して考えてみて、肩を竦める。

うん、絶対に怒られる。し、すごく心配される。

小学校のあの時だって、どれだけ迷惑や心配を掛けたか…覚えてる

のに。

なのに、またそうなるかも知れないことをしようとしてる…。

皆、ごめんなさい。

我が儘で…人の意見を聞かなくて。

でも、護りたい気持ちも、此処で皆と一緒に生きたいと思う気持ちも本物だ。

く第二話く（前書き）

ああー、学校疲れますよね…。

今日もありましたよ…、土曜なのに。

まあ、そんなことは置いといて。

序章編の二話目です。

いよいよっ、てところかな？

く第二話く

「久しぶりだなあ。……あんま、変わってないけど、でも少し……」
漏れ出す力が……強まってる、か？

木製の建造物である、記憶にあるものよりも老朽化が進んだ校舎を眺めながら、其処を包む気を讀もうとする。
一般的に靈気とか呼ばれる類のモノを。
……俺の出来ること、それをする為に……此処に来たんだから。

俺が住んでいるこの地域は都心に近い場所にあるけど、比較的自然が多い。

というか、山があつて、その中に町を造り上げている感じだ。
けど、土地柄なのか兎に角雰囲気が違う。

偶に、都心の方へと買い物をしに行く時があつて、そういう時も移動していると、ある境目でフツと、空気が変わるのが解かる。

まるで、何かの結界から抜けた様な感じ……もっとも、どれぐらいの人がそのことを解かるかなんて知らないんだけど。

それで、この小学校は山の中腹ぐらいの位置にある。

山自体はそんなに標高が高くないけど、……やっぱ坂を登らないとたどり着けない。

小学生の時は、大変だったな、特に夏が。

「優貴^{ゆき}？何をさっきからブツブツ言ってるんだ？」

「ん？何でもないっ。懐かしいなあゝって思っただけ。」

「お前は、卒業して以来だしな。俺は殆^{ほと}んど毎日来てるがな。」

「だって由兄^{よしにい}は学校の先生だし。…俺は、もう高校生で、小学校には来ないって。」

「まあ、そりゃそうだ。」

それで会話が途切れて、窮屈^{きうくつ}ではない沈黙が流れる。

自分の兄なんだから、一緒にいることは全然違和感もない。ほら、家族と言ったって四六時中話し続けている訳もないだろ？

今は、小学校の校門前にいて、啓^{けい}を待っているところだ。

自分たちが通っていた小学校までの道のりを迷う筈もないから、待ち合わせ場所をここにした。

時々取り留めもないような会話を、由兄と話したりして、五分ぐらい待っていたら、坂の下の方から啓らしき人物の姿が見えた。

「あっ！あれ、啓じゃないか？」

「ん、ああ、そうつぽいな。」

「啓ー！ー！ー！」

大声で、手を振りながら呼ぶと、啓は苦笑を浮かべながら手を振り返してくれた。

ああ、また呆れてるんだろな。あの顔は。

「まったく優貴は…、そんな大声を出さないでも聞こえるよ。

僕が君を無視して何処か行く筈もないんだから。それに今日は此処に用事があるんだし。」

「はは、ごめんって。最近、忙しくてなかなか会えなかったからさ。顔見たら、嬉しくなって、つい。」

自然と顔が綻^{はら}んで笑顔で言っちゃったら、啓は何故か溜息を吐きやがった。

って言っても、俺と話している時の啓はよくこういう仕種をするけど。

「君さあ、そういう笑顔、そう簡単にしちゃ駄目だよ？また、悪い虫に追い掛け回されるよ。」

何でか遠い眼差しをしながら、俺に助言？をくれた。
てか、悪い虫って？またって？

「その顔は、絶対、意味を理解してないね。…はあ、由貴^{よし}さんも大変ですね。」

「まったくだ。」

何故か解かんないけど、いつもは突っ掛かりあっている二人が同時に頷いてた。

何か感動した。

「何か今日は二人とも仲良いな。さあ、校舎ん中行こー。」

ヒクリと口端を引き攣らせた二人を見なかった事にして、俺は背を向けて校舎へと早足で歩き出す。

どうせ二人ともいつのまにか、俺の隣にいるんだから、気にしない。勿論、いつまでも一緒にいてくれるとは思ってないが。

…限りのある時間の中でも、その時、その人と一緒に居る事が出来るのなら、それは幸せだ。

俺が二人に向ける感情は絶対の信頼。

二人は俺を裏切らない。今までも、これからも…。

言葉や想いは、強靱^{きょうつじん}な力を生み、何かを守る糧^{かて}となる。

だから、俺は大丈夫。

ゝ第二話ゝ（後書き）

感想とかつて、送って貰えたら励みになります。
特にノロマな私には；

く第三話く（前書き）

あと二話ぐらいで第一章、になると思います。

はい、予定は未定ですよ…w w

ある程度は決めていても勝手にキャラが動きますから；

では、本文へどうぞ。

第三話

「じゃあな、由兄^{よしにい}。…帰る時に、また会おう。」

何時もは、また会おうなんて言わない…。

けど、今言って置かないときつと後悔する。

絶対など、この世界にはないことを、痛いほどに知っているんだ。

「？ああ…。今日は土曜だから…。四時ぐらいには鍵を閉める。
その時にな。」

俺が何処かおかしいことぐらい、由兄には分かるらしい。

じつと目を覗き込まれた…。俺の考えを読み取るうとしている時の由兄の癖だ、これは。

「うん。分かった、それまで啓^{けい}と色々見て回つとくから。」

「ああ…優貴^{ゆき}…」

「ん？何？…」

「いや、何でもない。俺は職員室にいる。何か用事があつたら来いよ。」

おい、そのお友達。優貴のことを頼んだぞ。」

「ええ、分かってますよ。」

「じゃあ、また後でな、優貴。」

「はい。じゃな、由兄。」

そう会話してから、由兄と別れる。

…由兄には悪いけど、たぶん俺は、その時間までに此処へ帰っては来れない。

由兄も、俺の不自然な態度から何かを感じてたみたいだけど…その血は覚醒していない。出来る事なら、そのまま…何も無ければいいのに。

何時もとは違う俺を気にしてか、ぎこちない足取りで去って行く由兄の姿を目に焼き付けて、意識しながらゆっくりと瞬きをする。

これは俺の昔からの癖で、気持ちを切り替えなければならない時にする事が多い。

さて、まずは…あれを探さないとな。

…木で造られた建造物は普通、暖かみを感じるモノが多いが、この学校は違う。

一種独特だ。

今、俺に纏わりついている空気が違う。

あの時、と同じ…誘ってる。此処じゃない、世界に。

「優貴、僕は君と一緒にいる。…例え、どういつことになっても、ね。」

ハッとして、啓の少し薄い焦げ茶色の瞳に視線を合わせると。

「今僕は君の傍にいる。これからも…。」

親友に向ける視線にしては、少し異常なほどの優しさが込められていて。
吃驚^{びっくり}したし、申し訳なさで心の奥が軋んだ、けど。
でも、すっごく心強い。

「…何か、いつもお前に助けられてる。ずっと…前から。
…俺は、お前を裏切ったのに。皆を、騙したのに。」

「それでも…僕は、いや皆は君のことが愛しくて大切なんだ。…信じられないかい？」

その言葉に救われた気がして、胸が詰まる。

けど、過去に犯した間違いは忘れてはいけないモノだ。
逃げられない、逃げてはいけない、モノだから。

「最初から信じてるって。ただ、俺が一番ム力つくのは…いつも、

最高、を選択出来なかった俺自身。今も、誘われてて、…正直怖いんだ。けど、行かないと…俺にしかできないこと、する為にも。」

「大丈夫。僕も行く。君を、一人になんかしない…。もし、離れてしまっても僕は絶対君の所へ行くから。それに、僕は諦めない。…前にも言っただろう？僕は君と一緒に生きていきたい。だから君も生きろ！って。」

その言葉に、記憶が蘇って、唇を噛み締める。
生半可な覚悟じゃ、この言葉は、紡げない。

「…はは、うん。そうだったな…俺は、『生を肯定する』から。」

自分の意思で、言葉を紡ぐ。

それは、力を持つ者にとって、一番重要なこと。

「うん。君がそう言うなら僕も安心だ。僕も、君と共に生きたいからね。」

軽い口調とは裏腹に、安堵が感じられて。
それだけ、心配させていたことを悟った。
…本当に、駄目だな、俺は。

俺はたった今、『生を肯定』した。

俺の得意な能力。言霊だ。ことだま

強い想いの込められた言葉は、誰のものでも力を宿す。

それにプラスして、俺は固有の能力を使い強化するんだ。俺の言霊は、強い。

ただ、それが絶対…とは断言できないのが辛いんだけど。

過去に起きたことは、もう終わってしまっていて。
どうしようもない。

それでもまだ、完全には決着が付いていないから。

…今度は、最善ではなく、最高を、選びたい。

く第三話く（後書き）

誤字・脱字などの指摘がありましたらどうぞ。

駄文ですが、読んでくださってありがとうございます。

ゝ第四話ゝ（前書き）

GW中ですね。

私は昨日、白川郷へ行ってきました。

きれいな景色でしたよ。

ただ、車で往復10時間は疲れました……。

さて、久しぶり？の更新です。

次回で話が進むといいな。

〜第四話〜

「…そろそろ行こうか…まずは封印の媒体を探そう。」

さつき、中に入る前にも探してみただけど…なんか、だいぶ封印が薄れてるみたいでさ。霊気の濃度が一定で、位置が分かりにくいんだ。でも、眼を感じる…今もずっと、俺の事を見てる。」

落ち着いて、改めて覚悟を決めたところで、啓に簡単な今の状況を説明する。

外で啓が来るのを待っていた時もずっと場所を探ってた。

けど、まるで霧のように充滿していて、封印している媒体…つまり簡単にいえば異界へと続く扉が見つけにくい。

まあ、ある程度のあたりはつけれるが。

それで校舎の中に入った時も思ってたんだけど。

俺のことを視てるのがイる。

「…一度異界に入り込んだ力ある者は、どうしても消す事の出来ない印^{しるし}が付いてしまう。」

おそらく、というか絶対これに気付かれた。

まさに俺の今の状況は、——格好の餌。

今のところは特に害もないし、影響も無いけど。

「…僕には優貴のような力が無いから感じられない。けど、それがあまり良くない状況だってことは解かるよ。…ねえ、僕たちが小学生だった頃、あの時はどういう状況でああなったんだい？」

「あの時は…俺自身が力を抑えきれていなかったのが原因だけど、でも、それだけじゃいきなり異界に取り込まれることは無い…ましてや、俺一人ではなく、啓も一緒となると……たぶん、桜の力…」

「…桜……？」

啓は、俺の過去にあったことを一部的に知っている。

ただ、その全ては知らない。

…当たり前のことか。

人はみんな、例外を除いて殆んどすべての人が前世なんて覚えていない。

輪廻転生…真実、真実でないということは置いて。

少なくとも今の俺にとって、それが起きたということは事実だからだ。

「実はさ。…あの時、解放された記憶があまりにも膨大で混乱してたし、…それに、幼過ぎて言えなかったことがまだあるんだ。」

「え？」

ぱちくりと瞬いた薄い焦げ茶の瞳が、こっちを見る。

…こういう、啓の優しく、透徹した眼差しが好きだと、ふと思う。俺にとってはあまり暴露したくは無いことだが。

啓を巻き込んでしまったのは、未熟な俺の所為だから、真実と事実を知る権利は、ちゃんと啓にある。

本当は……もう啓に嘘を吐きたくないだけなんだけど。

「あのさ、これから言うことは嘘じゃない。作り話でも無い…少しだけ昔の過去にあった本当の話なんだ。」

俺に甘い啓が、全てを否定することは無いと思う。

けど、もし俺が啓の立場で、啓が俺の立場だったとしたら、…たぶん俺は全てを信じることは出来ないだろう。

とても大切な親友だからと言って、全てを呑み込むことは出来ない。そんなに慈悲に満ちた人間には、為り切れない…。

「…僕が、君の真剣に言おうとしていることを疑うと思う？信じるよ、どんなに突飛な話でも。」

あと…君は自分で思っているよりも誰よりも優しく強い人間だ。君はもっと自分を信じてあげるべきだよ。」

そんなに、不安そうな表情をしていたらどうか。全てを見透かしているような笑顔で諭してくれる。

頭の良い啓のこと。きっと解かってるんだ…。今、俺がどんなことを考えていたか。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

二人で顔を見合わせて、同時にプツと吹き出す。

「あゝあ、なんか啓と話してると心配してるの、無駄って感じる。」

「優貴の悪い癖だね、考え過ぎは。」

「…そうだな。でも、それだけ失いたくないんだよ。怖いから、そうならない為に考えて予防線を張る。臆病だから。」

意識の深層で探って、一番力の強く、渦巻いている方向を睨み付けながら、言う。

血が騒ぐ。

役目を背負った血が。

「大丈夫だよ。」

トン、と背中に重みを感じて横を向くように振り返ると、焦げ茶の髪が見えて。

啓も俺と同じように背の低い方だ。…啓の方が何？か上だが。

ということとはつまり。

背中合わせに啓が俺に凭もたれているということか？

いきなりで硬直してしまった俺に、啓は気にした風もなく話し続ける。

「僕は、確かに力が無くて、優貴みたいに視た瞬間に総てが解かる訳でもない。」

それに小学生の時に行った時の異界で見た、過去の全てを思いだした訳じゃない。」

そう。啓は一回、俺の神隠しに巻き込まれている。小学生の時だ。その時に、俺の過去を一部見ているんだ。いや、嚴重に封印されていた筈の啓の前世の記憶が、俺の抑え切れなかった力と異界そのものに反応して引き摺り出された、というのが正しい。

あれは未熟な俺の犯した過ちあやまの一つだ。

「僕の前世の魂の持主と君の魂を持った誰かが、親しい…いや、恋人同士だったのかな…とにかく、そういう関係だったのも解かっている。もっとも、今優貴と一緒にいるのは、僕自身の意思だよ、誤解しないでね。」

まあ、何が言いたいのかというと、僕は君を支えて守るけど、僕自身も君と生きるってことだよ。

だから、優貴も自己犠牲なんてやめてね。絶対に、皆で生きる事を第一に考えるんだ。」

……ああ、やっぱり。

やっぱり、啓にはバレてたんだ。

俺が、最終手段として、それも考えに入れていたこと。

「…分かった、約束する。絶対。」

「うん。いい」

まるで親が子供に言うみたいない口調だったから苦笑が浮かんだけど、いつも進んでいない話題を元に戻そう。

「本題に戻るけどさ、桜は、俺の魂の前世の持ち主の名前だよ。啓も、俺の魂の前世の姿を見ただろ？」

前世の自分とは言わない。

言葉に引き摺られて、今の自分を見失っではいけないから。

啓にも、そう教えた。これは生と死、今と過去、の境界線を越えない為の措置だからだ。

「うん、あれは最初、優貴本人かと思った。ホントにそっくりだったしね。…性別は違ったし、髪の毛の長さも違ってたけど、雰囲気は似てたから。」

純黒の大きな瞳と腰までの長い真っ直ぐな髪。背は平均よりも低く、体格は華奢。

巫女装束を身に纏ったその立ち姿は死に向かうものの特有の凜とした雰囲気漂わせていて。

客観的に見た昔の「私」は正直に言って、少し恐かった。

たぶんその心情も啓の魂の昔の持主だった人が思ったことと同じだ。俺は啓の感覚を通して視てしまったから。

「…そっか。…小学生の時に名前を教えなかったのは桜の力にあれば以上巻き込まれないようにしたかったから。真名^{まな}はさ、強力な力を持っていて、そこに縛り付けるんだ。あの時は、俺も啓も個人として確立してなくて、危険だったから。」

「…ごめん、今まで言わなくて。」

俺と雰囲気似ていたということは、あの時感じた恐いという感覚を今も啓が感じているということ。俺の本質はずっとそのままか…。

真名はその人を創造するのと同時に縛り付ける。

俺のユキも、ちゃんと意味がある。血筋の中に流れ続け、刻まれた魂を受け継いだ、俺の存在の意味そのもの。

もし、廃校になるのがあと十年でも先だったなら、このことは啓には告げないままにしようと思っていた。

けどまだ成長段階の俺では、安定した力を出す事が出来なくて、桜のように犠牲を産み出してしまう。

だから、啓の存在が必要だった。

啓には桜からの餞別^{せんべつ}として俺の能力を安定させる力が宿っている。

桜が死の間際、駆け付け現れた啓の前世の魂の持ち主に授けたものだ。

「…こんなこと言うと、優貴には不本意かもしれないけど。僕は、廃校になるのが決まって良かったとも思うよ。」

だって、こうでもならなければ…桜さんのように誰にも言わずに一人で立ち向かったんだろう？」

俺の横に移動して顔を覗き込んできた啓に、力無く笑う。
…やっぱバレてる。

「うん、そうした。」

「だろうね。…でも、今回は僕を頼ってくれた。僕には、優貴の力になれる何かがあるみたいだね。
小学校の時にも、そういう風な事を言ってたしね。」

本当に、啓の考察力というか推察力、観察力というか、感心してしまふ。

ていうか、小学校のときで、しかもあのときって結構パニックになつてたような…。

よく、覚えていられるよな。

感心していいのか、呆れていいのか、良く分かんなくんできて、とりあえず溜息を吐いておく。

「はあ、よくそんなの覚えてるよな。…啓には、俺の力を安定させる能力があるんだよ。

ただ、これは啓に付属しているようなものだけだ。」

………恥ずかしいから言っちゃらないけど、啓自身は精神的な安定剤だ。

啓が傍にいただけで、安心する。
何でかは、知らないけど。

「へえ、そんな能力があったのか。…うーん、だから僕の傍にいる優貴はリラックスムードなのかな？」

心臓が一瞬跳ね上がった。

まさか気付かれてるとは、…恐ろしや。

「っ、もう行こう！桜の封印した媒介、探そう！」

真っ赤とまではいかなだろうけど、紅くなっている頬を直視されない内に目的の場所に向かって歩き出す。

若干早足なのは仕方ない。

置いてきた筈の啓がいつの間にか横に並んでいて、にこにこ笑っているような気がするけど、気にしない。

そう、気にしたら負けだ。

もう直ぐ。

遺した力が蘇る。

今度は、皆笑顔がいい。

ゝ第四話ゝ（後書き）

誤字・脱字などありましたら教えて下さい。

後、GW中は不定期更新になると思います。
更新したりしなかったり…。

ご読了ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9282k/>

鏡界～きょうかい～

2010年10月14日12時07分発行